

学籍番号： 4315100250

氏名： 田口 うらら

実習先： 口之島

実習期間：令和元年12月13日～12月15日

1. 自然環境

トカラ列島の最北端に位置し、今も水蒸気を吐き出す燃岳に象徴される火山島。島のほぼ中央にそびえる前岳（628m）山麓に広がる原生林からセラナマ温泉辺りにかけて、野生牛（純血種の黒毛和牛）の姿が見られる。また、前岳のやや西に位置する横岳（501m）には、山頂まで舗装道路が延び、トカラの島々を望むことができる。

トカラ列島は、霧島・屋久島火山帯に属す。口之島では温泉が自噴している。

【地形】口之島から悪石島までの各島は火山特有の地形であり、周囲は断崖絶壁に覆われ起伏が激しく平坦地が少ない地形。

【気候】温暖で雨も多く、夏季は台風の常襲地帯であり、冬季は北西からの季節風が強く吹く。

【立地】

北緯: 29° 08' ~29° 59' 30"

東経: 129° 13' ~129° 55' 01"

鹿児島からの距離: 204 km

面積: 13.33 km²

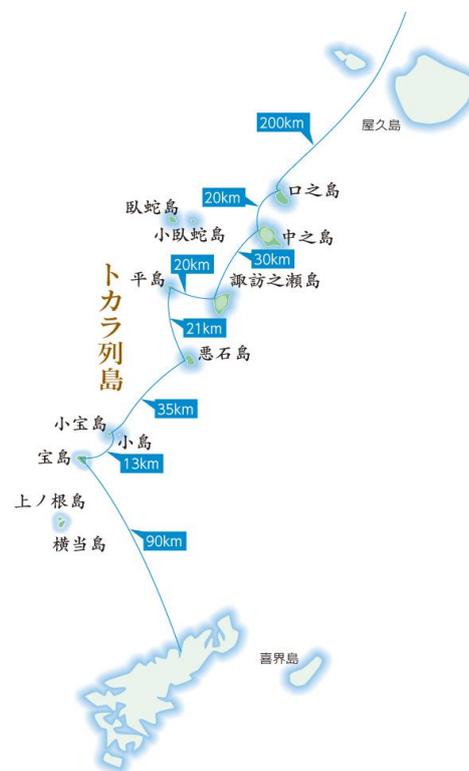
周囲 20.38 km

最高点: 628.3m

動植物: タモトユリ、アダン(北限)、トカラヤギ、野生牛

土地の利用状況: 牧場、水田、畑など

集落: 口之島、西之浜



2. 社会的背景

【人口構成】 男 61 人、女 67 人、計 128 人。

【世帯数】 75 世帯

【高齢化率】 男性 34%、女性 44%、計 39%

【産業】 第 1 次産業(畜産・農業・漁業) 17 人 (30%)、第 2 次産業 13 人 (23%)、第 3 次産業 26 人 (46%) の計 56 人 (平成 22 年)

【シンボルマーク】

十島村のシンボルマークは7つの島の団結と連帯感を表しており、「TOKARA」は音の響きに心地よさとイメージを大切にしたもので、ローマ字は今後国際化への対応を表している。また、カラーはブルーで十島村の海の透明の美を表している。



【村のキャッチフレーズ】

「刻（とき）を忘れさせる島 吐噶喇」十島村は、屋久島と奄美大島の間、有人七島と無人五島からなる南北約160kmという「南北に長い村」。火山の島、珊瑚礁の島、温泉の島とそれぞれに特色を持つ無垢の自然と、大和・琉球の両文化の影響を受けた特有の文化を有し、人情豊かな人の輪が脈々と息づいている。

【歴史】

口之島という地名は江戸期からあり、薩摩国川辺郡だった。薩摩藩直轄地で郷（外城）には属さず、薩摩藩の船奉行の支配下に置かれていた。中之島や宝島と同様に津口番所、異国船番所、異国船遠見番所が併置されており、鹿児島城下より派遣された在番と横目が常駐しその他郡司、島民から推挙された2名が島政を行った。「薩藩政要録」及び「要用集」によると、所惣高110石余とある。

1896年(明治29年):川辺郡から大島郡に移管され、1908年(明治41年)に島嶼町村制が施行されたのに伴い、島の全域が十島(じっとう)村の大字「口之島」となった。

1946年(昭和21年):1月29日 連合軍最高司令官により発令された「SCAPIN 第677号」のうち日本の範囲から除かれる地域として「北緯30度以南の琉球(南西)列島(口之島を含む)」という条項があり、これにより日本国政府は口之島を含む北緯30度線以南での行政権及び司法権が一時的に停止され、口之島はアメリカ合衆国の臨時北部南西諸島政庁の施政下となった。

1952年(昭和27年):トカラ列島が本土復帰したのに伴い、十島(としま)村が発足し、十島村の大字となった。三島村を含めた有人十島を合わせて「じっとうそん」と呼んでいたが、日本復帰後は、三島村の三島と分離し、七島だけを「としまむら」と呼ぶようになった。

【教育】

口之島小中学校のみ。高校はない。

十島村の小中学校では山海留学を実施しており、17人受け入れている。

十島村山海留学制度:本土の小学校や中学校から生活の場を移し、離島の小学校や中学校に通学し、学校教育を受けつつ、自然を受け入れ、自然のすばらしさ、きびしさを学ぶことで、生きる喜びや自信、経験の領域を広げることを目的とした制度。平成3年度よりスタートし、児童生徒を村内に受け入れることで、地域や学校、教育の活性化を図ることや子どもが島で生活することで、豊かな自然に触れ、素朴な人情の温かさを接し、心の触れ合いの大切さを学び、元気でたくましい子どもを育てることを目的としている。

3. 住民の生活

島には売店が1件のみで、開いている時間も短く、価格も高く感じた。船の到着時と出発時には多くのコンテナが運ばれ、島民は荷物を取りに来ていた。フェリーには、島に停まっているときだけ一時的に入ることができ、小学生がフェリー内の自動販売機のアイスを買いに来ていた。

島にはフェリーのみでしか行くことができないが、2018年4月に就航した新しい船でとてもきれ

いな船内だった。また、以前より少し速度が速くなり、時間が短縮した。

離島住民運賃割引というものもあり、島民であれば鹿児島島から口之島まで 1660 円で正規の値段よりかなり安いそうだ。島の方の話を聞くと時々、島の外に出て鹿児島まで来ているようだった。



【風習・習慣】

シチゲー：旧暦 1 月 25～28 日

オシマチ：旧暦 1 月

山の神祭り・オツセ様祭り：旧暦 1 月 16 日

2 月祭り：旧暦 2 月

清所：旧暦 2 月 9 日

彼岸の御岳参り：旧暦 3 月

漁のガンタテ：旧暦 3 月 3 日

漁入れ：旧暦 3 月 4 日

本えびすまつり：旧暦 5 月 3 日

ホパナ様：旧暦 7 月

盆：旧暦 7 月 12～16 日

ハッサクの節句：旧暦 8 月 1 日

八月祭り：旧暦 8 月 6 日～

山の神祭り・オツセ様祭り：旧暦 9 月 9 日

口之島狂言：新暦 8 月 15 日

霜月祭り：旧暦 11 月に行われる祭りで、島内のお宮に新米で作った酒やサトイモを供え、
家族の健康と農業の豊作を祈る祭り。トカラ列島でも由緒ある大祭の一つ。

【名所】

平瀬海水浴場：

西之浜漁港近くにある自然海岸を利用した海水浴場。潮の干満によっては魚と泳ぐことができる。





コウ（湧き水）：

口之島集落の中心に大きなガジュマルの木があり、その下に泉がある。今でもこんこんと湧く澄んだきれいな水は大切な水源である。



瀬良馬温泉（セランマ温泉）：

トカラ列島の最北端、口之島の南端に位置する燃岳の麓にある自然豊かな温泉保養施設。集落からはおよそ9kmで、車で20分かかり、広葉樹林の斜面にあり、眺望はとてもすばらしい。

口之島フリー岳展望施設：

太平洋戦争敗戦後、フリー岳以南が占領軍下におかれるなど、日本の歴史的にも重要な意味を持つ場所。晴れた日には屋久島や三島村を一望できる。



4. 医療供給体制

島には病院はなく、へき地診療所があり、看護師が1人常駐。

鹿児島赤十字病院の月2回程度の診療に加え、平成27年4月から、県立大島病院の医師が隔週で巡回診療を行っている。



その他、鹿児島こども病院による小児診療や鹿児島大学による眼科、皮膚科、耳鼻咽喉科、歯科などの特定診療科の検診も行われている。

救急発生時には、ドクターヘリ、鹿児島県防災ヘリ、海上自衛隊ヘリが要請される。

実習概要

日付	内容
12/14	根管治療 義歯のリライン 義歯のリライン 義歯調整 義歯調整 義歯調整 限局性の歯周炎 
12/15	智歯周囲炎

振り返り記録

【歯科診療】

大学では、必要なものが診療室にわかりやすく収納されているのに比べ、どこに何がしまわれているかすべて把握できていなかったため、器具などを探すのに手間取ってしまい、効率良く診療するのが難しかった。

レントゲン撮影する設備は島にはないので、ポータブルのX線撮影機器でデンタルX線写真の撮影を行った。現像も臨床の場では、機械で読み取り、パソコン上で確認するが、今回は、フィルムに現像液をシリンジで注入して現像し、光が出る小さな機械にかざして読影を行った。原始的なやり方では、拡大することもできず、非常に見づらく、普段パソコン上でレントゲンを見ているのはすごく恵まれていることだと実感した。



歯石が大量に沈着した総義歯を使っている方もいれば、毎日義歯洗浄剤で洗浄していて、とても綺麗な義歯を使っている方もいて、歯科医院に簡単に行けない分、個人によって歯科に対する姿勢が違い、口腔衛生状態に大きな差が出てしまうと感じた。

島の方は時間に寛大そうというイメージをもっていたが、看護師さんから、「島の方は順番とか時間に厳しいから順番は守って診療してほしい」、と言われていたので遣り繰りに気を遣った。

今回は高齢のためコミュニティセンターまで来られない患者さんを家まで出向いて、治療が必要かどうか確認し、必要であれば車で送迎するというのを2人の患者さんに行った。島は急な坂が多く、車がないと大変そうだった。特に高齢の方は大変そうだったので、高齢の方は、コミュニティセンターまで車で送迎するのも良いのではないかなと思った。

【島での生活】

2日とも晴れていて、とてもきれいな景色を楽しむことができた。見晴らしのいいフリイ岳では、屋久島や三島村まで見ることもできた。平瀬海水浴場は、海の水が透明で、見たことのない柄の貝殻や蟹なども見ることができた。

島の道は急な坂が多く、また、バナナの木やパッションフルーツの木など珍しい植物がたくさんあった。

宿泊した民宿はご飯がとてもおいしく、毎回お腹いっぱいになった。

朝は、みんな疲れて寝ていたらおかみさんが起こしてくださった。

フェリー乗り場から民宿までは民宿の方が車で送迎してくださった。民宿の方はとても気さくな方で話しやすかった。

